S1B1

今、なぜバイオベンチャーか

○根本 直人 ((株) ジェンコム)

ヒトゲノム計画に始まるゲノム科学は生命科学の産業化に向かって確実に大きな流れを形成した。同時にそれは、量（大量のゲノム情報）が質（研究手法）までも転換させる現象を生み出し、製薬企業等の既存産業も巻き込みながらダイナミックなうねりとなった。そこでは生物物理学的手法である大量 DNA シーケンス技術が大きな貢献をしている。ゲノム科学における生物物理学の果たす役割は極めて大きい。今後も生命現象を様々な角度・レベルで解析する手法を開発している生物物理学会は生命科学全体の進歩・産業化に大きな影響を与えられると思われる。しかし、基礎科学的な生命科学の産業化という新たな局面を迎えて、既存の大学あるいは大企業の研究開発方式が必ずしもうまく機能しないこともわかってきた。基礎的色彩の濃いベンチャー企業から派生して数年間のうちに DNA チップのシステムを構築した Affymetrix 社のダイナニズムは極めて象徴的である。日本においても新たな「研究開発システム」としてのベンチャーが求められている。

しかし、掛け声のわりには本格的な研究開発型ベンチャーの運営が難しい現状も明らかになってきた。日本における様々なインフラの欠如、また、我々自身のベンチャーに対する意識の問題も大きい。今回のシンポジウムでは、実際にベンチャーを立ち上げておられる方々に現状分析から研究とビジネス、大学とベンチャーに関する「生の意見」を伺う。若い研究者にとってベンチャー企業が活躍の舞台となるかどうかは、今後の日本においても大きな課題である。ベンチャーに関わる極めて重要な「インフラ」は大学院生も含めた研究者自身の「意識」とも言える。「ベンチャーと中小企業はどう違うのか?」という素朴な疑問に始まり、このシンポジウムがベンチャーを様々な角度から積極的に考察する契機になることを期待する。

N.Nemoto : An Introduction to Bio-venture: How should we get along with Bio-ventures?

S1B3

日本におけるベンチャー立ち上げに関する課題と提案 ～これまでの経験を通して感じること～

○小林 利克 ((株) ジェンコム)

革新的なサイエンス・技術のみが試行錯誤を繰り返すベンチャー企業群の挑戦によって初めて確実に利益を生み出せる事業創出に繋がる。それがまたいろいろな形でアカデミア、ベンチャー企業活性化のためにフィードバックされ、はじめてスパイラルが順調に回ることができる。また、ハイテク産業、新規産業分野創出においてはアカデミアにおける成果が直接、既存企業における新事業開発に移行するケースは少ない。ベンチャー企業がそのギャップを埋める役割をしていることは、大学における提携研究が既存企業からベンチャー企業へと大きくシフトし始めていることから明らかである。このような時代の要請にもかかわらず日本における骨太なベンチャー創出は必ずしも順調とは言えない。これまでに具体的に経験し、あるいは目下直面しているベンチャー立ち上げに関する課題は多く、しかも複雑に絡み合っている。それらの問題・課題が生じる原因・経緯や今後、我々が採るべき対応策や挑戦すべき変革を簡単に纏めてみた。1) ハイテク事業創出におけるベンチャーの役割、重要性の認識不足「産業創出スパイラルにおけるベンチャー企業の役割と位置付け」2) ベンチャー育成環境（インフラ）の未成熟…特にベンチャーキャピタルの力不足「知識・理解・評価能力不足、投資資金規模の小ささ、長期的コミット意識の欠如、ハンズオン機能の欠落」3) アントレプレナー・CEO 人材の絶対的不足、発掘困難「感性ある者は自然に集まり、能力ある者は自発的に急速に成長する」4) 大企業からのベンチャー派生の難しさ「既存企業とベンチャー企業間の経営手法、資金調達法は全く異なる」5) 日本、日本人における精神、価値観等の近代化、変革の必要性 「日本人の精神文明は産業界のみならず日本全体の閉塞感を打ち破るには甚だ力不足」

K.Kobayashi : Some unfavorable things encountered in starting up of small innovative companies in Japan

S1B2

ベンチャービジネス論

○飯山 直樹 (あおぞら銀行)

ベンチャー活動が活発化するに連れて、各大学・大学院においても「ベンチャー経営論」的な講座を作り、経営学的な見地からベンチャー経営の本質に迫ろうとする研究活動が行われ始めているが、経営学としてのベンチャー研究は未発達であり、その研究活動も極めて狭く、国内経営学研究者に頻繁に見受けられるように、ビジネス活動には直結しない現実離れした範囲で行われている。一方で、現実的なビジネスには大企業もベンチャー企業もなく、みな同じ「マーケット」と言う一つの戦場で戦うゲームでしかない。ベンチャーだから特別に許されるものなどなく、ベンチャーとしての利点を生かしてゲームに勝利するための、ベンチャー王道を如何にして当たり前の如く進めるかにある。当発表では現実的なビジネスとしてのベンチャー経営論について以下の様に論じ、ベンチャー王道について結論付けたい。1) なぜ挑戦するのか（起業家精神）2) ベンチャーの心構え（リーダーシップ、信念、執念、ハードワーク）3) 経営学における企業の定義4) ベンチャー経営の本質（専門性・得意分野の追求、時間の管理）5) ビジネスと実践6) ビジネスブランとは何か（ビジネスの言語は数字）7) 決算書8) ベンチャーの組織（CEO～CXO）9) ベンチャー金融10) ベンチャーキャピタルと株式公開（ベンチャービジネスの定義～ベンチャーキャピタル～IPO）11) 目標に到達する為に（事業行動の認識：フィロソフィー～コンバット）12) 大学とベンチャーの協力13) なぜ挑戦するか?（ベンチャーを目指す人へ：～ベンチャーへの準備～キャピタルゲイン＝エネルギー）物事には必ず良い面と悪い面の両方が存在する。最も良い決断から比べれば、些細なことはどうでも良いことなのである。シンプルに考えられれば、結論は必ず一つしかない。ベンチャーの本質は「楽しい仕事をして、人生をハッピーにすること」である。

N.Iiyama : Start-up Knowledge in Venture Business

S1B4

産官学連携と大学発ベンチャーの意味

○森下 竜一^{1,2} （¹ 阪大院・医学系・遺伝子治療、² アンジェス MG）

ヒトゲノム解読終了により、遺伝子やタンパク質の機能解析が急速に進み、革新的な診断・治療法が実現すると期待されている。現在、欧米各国においてはゲノム情報を基盤とした産業化が急速に進みつつあり、ポストゲノム・バイオテクノロジーの実用化に入ってきた。日本の生命科学の基礎研究、医療、バイオ分野の各種産業が欧米諸国に比べ決して劣っているわけではない。問題は基礎研究の成果をいち早く実用化し、医療や各種産業に応用するメカニズムがない点である。欧米では、大学からスピノフした多くのバイオベンチャーが実際の技術を世に出し、新しい医薬品を創出し、社会に貢献するとともに、経済活性化に寄与している。これは、経済構造が従来の大企業中心からグローバルイゼーションの進行の中で地場産業・機関としての大学・大学発ベンチャーが中心の形態へ変化してきていることを示している。大学発ベンチャーを中心とした経済再生を推進する方策として、経済産業省の経済再生プラン（平沼プラン）においては大学発ベンチャー 1000 社創出が盛り込まれており、大学の知の集積を産業化につなげることが期待されている。演者も、実際に創業系バイオベンチャー（アンジェス MG 社）を起業し、現在自らの技術を社会還元すべく、努力をしている。その要となるのは、産官学連携や地域連携であり、実効性を挙げなければ生き残りは困難になるであろう。そのための方策として下記のような案を提示したい。1) 知的経済特区の創設 2) エンゼル税制・研究開発費控除の拡大 3) 大学発ベンチャー支援ファンドへの補助 4) 大学内産学連携室・TLO の拡充と充実 5) 大学発ベンチャー創出・援助のためのグラント整備

R.Morishita : Role of University-Spin off Venture from a Viewpoint of Academia Government Industry Partnership